Linear stability analysis of small-scale fluvial bed waves with active suspended sediment load

中里遥介*・泉 典洋**

Yosuke NAKASATO and Norihiro IZUMI

*学生会員 北海道大学大学院工学研究科 環境フィールド工学専攻 (〒 060-8628 札幌市北区北 14 条西 8 丁目) **正会員 Ph.D. 北海道大学大学院工学研究科 環境フィールド工学専攻

Small-scale fluvial bed waves such as dunes and antidunes formed on river beds during floods increase the bed resistance, causing rises in water levels. Therefore, it is important to obtain detailed information on the conditions for the formation of bed waves. One of the purposes of this study is to extend the existing linear stability analysis of the formation of small-scale bed waves to the case with active suspended sediment transport. The analysis reveals that the critical Froude number for the formation of dunes is reduced, and the dune formation tends to be inhibited with increasing suspended sediment load.

Key Words : dune, antidune, linear stability analysis, suspended sediment

1. はじめに

流量が大きく変化する状況下では、河床形態は流量 の変化に応じて複雑な挙動を示すことが知られている. Froude 数が比較的小さいとき、平坦床は不安定であり、 河床上は dune と呼ばれる河床波で覆われる. Froude 数 がある値を上回ると dune は消滅し、平坦床か antidune が現れる. dune は下流側に勾配の急な斜面を有してお り、そこで流れの剥離が発生するため、流水に対して 大きな抵抗となることが知られている. dune の形成に より河道抵抗の増加とそれによる水位の上昇が生じる ため、dune の発生条件を精度良く知ることは河川工学 的にも重要な問題である.

Colombini²⁾は開水路の乱流モデルとして混合距離仮 説を用い,独自の掃流層モデルを導入することによっ て,duneだけでなくantiduneの実験結果まで良好に 説明できる河床波の線形安定解析を提案している.ま た泉¹⁾は,Colombini²⁾の線形安定解析を弱非線形領域 に拡張し,ある条件下ではdune-平坦床遷移が亜臨界 分岐で特徴付けられることを示している.彼らの研究 は,duneとantiduneの発生領域をより精密に再現し, その非線形安定性まで明らかにした点で画期的ではあ るものの,土砂の輸送形態として掃流砂のみしか考慮 されておらず,活発な浮遊砂を伴う条件下における小 規模河床形態の発生や遷移現象に適用することはでき ない.

本研究の目的は,既存のモデルに浮遊砂の移流拡散 方程式を導入すると同時に,河床高の時間変化式に浮 遊砂による河床変化の項を導入することによって,浮 遊砂が活発に生じる場合に適用できる河床波の線形安 定解析を提案することである.解析によって,活発な





浮遊砂が河床波の発生メカニズムにどのような影響を 与えるのかを理論的に明らかにする。

2. 支配方程式

2.1 流れの方程式

流れの支配方程式は Reynolds 平均を取った二次元の Navier-Stokes の運動方程式および連続の式である。移 動床現象では、河床変動の時間スケールと比較して流 れの変動の時間スケールが十分に早い。そこで非定常 効果は河床高の時間変化式でのみ考慮し、流れは定常 とみなす準定常の仮定が可能となる。この仮定を用い ると流れの方程式は次式のようになる。

$$U\frac{\partial U}{\partial x} + V\frac{\partial U}{\partial y} = -\frac{\partial P}{\partial x} + 1 + \frac{\partial T_{xx}}{\partial x} + \frac{\partial T_{xy}}{\partial y}$$
(1)

$$U\frac{\partial V}{\partial x} + V\frac{\partial V}{\partial y} = -\frac{\partial P}{\partial y} + S^{-1} + \frac{\partial T_{xy}}{\partial x} + \frac{\partial T_{yy}}{\partial y} \quad (2)$$

$$\frac{\partial v}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial y} = 0 \tag{3}$$

ここでxおよびyはそれぞれ流下方向および水深方向 の座標, UおよびVはそれぞれxおよびy方向の流 速,SおよびPはそれぞれ平均河床勾配および圧力, $T_{ij}(i, j = x, y)$ は Reynods 応力テンソルである.

混合距離仮説を用いると Reynolds 応力テンソルは次のように表される.

$$T_{xx} = 2\nu_T \frac{\partial U}{\partial x} \tag{4}$$

$$T_{yy} = 2\nu_T \frac{\partial V}{\partial y} \tag{5}$$

$$T_{xy} = \nu_T \left(\frac{\partial U}{\partial y} + \frac{\partial V}{\partial x} \right) \tag{6}$$

$$\nu_T = l^2 \left| \frac{\partial U}{\partial y} \right| \tag{7}$$

$$l = \kappa(y - Z) \left(\frac{D + R - y}{D}\right)^{1/2} \tag{8}$$

ここで ν_T は渦動粘性係数, lおよびD, Z, Rはそれぞ れ混合距離および水深, 底面高さ, 基準面高さ(対数 分布則で流速がゼロとなる高さ. **図**-1 参照) であり, κ は Kármán 定数 (= 0.4) である.

また上式ではすでに次のような無次元化が行われて いる.

$$(\tilde{U}, \tilde{V}) = \tilde{U}_{f0}(U, V) \tag{9}$$

$$(\tilde{x}, \tilde{y}, \tilde{D}, \tilde{Z}, \tilde{R}, \tilde{d}_s) = \tilde{D}_0(x, y, l, D, Z, R, d_s)$$
(10)

$$(\tilde{P}, \tilde{T}_{ij}) = \rho \tilde{D}_0^2(P, T_{ij}) \tag{11}$$

$$\tilde{\nu}_T = \tilde{U}_{f0} \tilde{D}_0 \nu_T \tag{12}$$

ここで ([~]) は有次元の変数を表し, $\tilde{U}_{f0}(=\sqrt{g\tilde{D}_0S})$ および \tilde{D}_0 はそれぞれ平坦床基準状態における底面摩擦 速度および水深, d_s は河床材料の無次元粒径, ρ は水 の密度,g は重力加速度 (= 9.8 m²/s) である.

次のような流関数 ψを導入する.

$$(U,V) = \left(\frac{\partial\psi}{\partial y}, -\frac{\partial\psi}{\partial x}\right) \tag{13}$$

流関数を用いると式 (1) および (2) は次のように書き 直される.

$$\frac{\partial \psi}{\partial y} \frac{\partial^2 \psi}{\partial x \partial y} - \frac{\partial \psi}{\partial x} \frac{\partial^2 \psi}{\partial y^2} = -\frac{\partial P}{\partial x} + \frac{\partial}{\partial x} \left(2\nu_T \frac{\partial \psi}{\partial x \partial y} \right) + 1 + \frac{\partial}{\partial y} \left[\nu_T \left(\frac{\partial^2 \psi}{\partial y^2} - \frac{\partial^2 \psi}{\partial x^2} \right) \right]$$
(14)

$$\frac{\partial \psi}{\partial x} \frac{\partial^2 \psi}{\partial x \partial y} - \frac{\partial \psi}{\partial y} \frac{\partial^2 \psi}{\partial x^2} = -\frac{\partial P}{\partial y} - \frac{\partial}{\partial y} \left(2\nu_T \frac{\partial \psi}{\partial x \partial y} \right) - S^{-1} + \frac{\partial}{\partial x} \left[\nu_T \left(\frac{\partial^2 \psi}{\partial y^2} - \frac{\partial^2 \psi}{\partial x^2} \right) \right]$$
(15)

上式から P を消去すると次式が得られる.

$$\frac{\partial\psi}{\partial y}\frac{\partial\nabla^{2}\psi}{\partial x} - \frac{\partial\psi}{\partial x}\frac{\partial\nabla^{2}\psi}{\partial y} - 4\frac{\partial^{2}}{\partial x\partial y}\left(\nu_{T}\frac{\partial\psi}{\partial x\partial y}\right) + \left(\frac{\partial^{2}}{\partial x^{2}} - \frac{\partial^{2}}{\partial y^{2}}\right)\left[\nu_{T}\left(\frac{\partial^{2}\psi}{\partial y^{2}} - \frac{\partial^{2}\psi}{\partial x^{2}}\right)\right] = 0 \quad (16)$$

$$\nabla^2 = \frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} \tag{17}$$

2.2 浮遊砂の移流拡散方程式

浮遊砂の移流拡散方程式は次のように表される.

$$\frac{\partial F_x}{\partial x} + \frac{\partial F_y}{\partial y} = 0 \tag{18}$$

上式では流れの支配方程式と同様に、準定常の仮定を 用いている.また F_x および F_y はそれぞれ \tilde{U}_{f0} で無次 元化された x および y 方向の浮遊砂フラックスであり、 次式で表される.

$$F_x = UC - \nu_T \frac{\partial C}{\partial x} \tag{19}$$

$$F_y = (V - v_s)C - \nu_T \frac{\partial C}{\partial y}$$
(20)

ここでCは浮遊砂濃度であり、 v_s は浮遊砂粒子の沈降 速度である。またここでは浮遊砂の拡散係数は渦動粘 性係数 ν_T とほぼ等しいと仮定した。

式 (18)-(20) より浮遊砂の移流拡散方程式は次のよう に書き直される.

$$U\frac{\partial C}{\partial x} + (V - \upsilon_s)\frac{\partial C}{\partial y} = \frac{\partial}{\partial x}\left(\nu_T\frac{\partial C}{\partial x}\right) + \frac{\partial}{\partial y}\left(\nu_T\frac{\partial C}{\partial y}\right)$$
(21)

また浮遊砂粒子の無次元沈降速度 v_s は Rubey の実験 式より次のように表される.

$$\upsilon_s = \frac{\tilde{\upsilon}_s}{\sqrt{R_s g \tilde{d}_s}} = \sqrt{\frac{2}{3} + \frac{36}{R_p^2}} - \frac{6}{R_p}$$
(22)

ここで R_p は粒子 Reynolds 数と呼ばれる無次元パラ メータであり、以下の式で表される.

$$R_p = \frac{\sqrt{R_s g \tilde{d}_s \tilde{d}_s}}{\nu} \tag{23}$$

ここで ν は動粘性係数 (= $1.0 \times 10^{-6} \text{ m}^2/\text{s}$) である.

3. 変数変換

水面および底面において境界条件の適用を容易にす るために次のような変数変換を行う.

$$\xi = x \tag{24}$$

$$\eta = \frac{y - R(x)}{D(x)} \tag{25}$$

するとxおよびyに関する微分は次のように変換される.

$$\frac{\partial}{\partial x} = \frac{\partial}{\partial \xi} - \frac{\eta D_{,x} + R_{,x}}{D} \frac{\partial}{\partial \eta}$$
(26)

$$\frac{\partial}{\partial y} = \frac{1}{D} \frac{\partial}{\partial \eta} \tag{27}$$

ここで (), $_x$ は x に関する偏微分を表す. この変数変換 により境界条件を適用する水面および底面はそれぞれ $\eta = 1$ および $\eta = 0$ に対応する. また上式の変数変換を用いると,無次元混合距離1は 次のように表される.

$$l = \kappa D\left(\eta + \frac{R - Z}{D}\right) \left[\left(\frac{1}{1 + (R - Z)/D}\right) (1 - \eta) \right]^{1/2}$$
(28)

ここで (R - Z)/D << 1として無視すると上式は次のようになる.

$$l = \kappa D\left(\eta + \frac{R - Z}{D}\right) (1 - \eta)^{1/2}$$
(29)

4. 境界条件

水面および底面における流れの境界条件は次のよう になる.

$$\vec{U} \cdot \vec{e}_{ns} = 0$$
 at $\eta = 1$ (30)

$$\vec{e}_{ns} \cdot \mathbf{T} \cdot \vec{e}_{ns} = 0 \text{ at } \eta = 1$$
 (31)

$$\vec{e}_{ts} \cdot \mathbf{T} \cdot \vec{e}_{ns} = 0 \text{ at } \eta = 1$$
 (32)

$$\vec{U} \cdot \vec{e}_{nb} = 0 \text{ at } \eta = 0$$
 (33)

$$\vec{U} \cdot \vec{e}_{tb} = 0 \quad \text{at} \quad \eta = 0 \tag{34}$$

ここで \vec{U} は流速ベクトル (= (U,V)) であり, \vec{e}_{ns} およ び \vec{e}_{ts} は水面に対するそれぞれ法線および接線方向の 単位ベクトル, \vec{e}_{nb} および \vec{e}_{tb} は底面に対するそれぞ れ法線および接線方向の単位ベクトル,**T**は応力テン ソルであり,それぞれ次式で表される.

$$\vec{e}_{ns} = \frac{(-(R+D)_{,x}, 1)}{[1+(R+D)^2_{,x}]^{1/2}}$$
(35)

$$\vec{e}_{ts} = \frac{(1, (R+D), x)}{[1+(R+D)^2, x]^{1/2}}$$
(36)

$$\vec{e}_{nb} = \frac{(-R_{,x},1)}{[1+R^2_{,x}]^{1/2}}$$
(37)

$$\vec{e}_{tb} = \frac{(1, R_{,x})}{[1 + R^2_{,x}]^{1/2}}$$
(38)

$$\mathbf{T} = \begin{bmatrix} -P + T_{xx} & T_{xy} \\ T_{xy} & -P + T_{yy} \end{bmatrix}$$
(39)

同様に水面および底面における浮遊砂輸送の境界条 件は次のようになる.

$$\vec{F} \cdot \vec{e}_{ns} = 0 \text{ at } \eta = 1 \tag{40}$$

$$\vec{F} \cdot \vec{e}_{nb} = \frac{\tilde{E}_s}{\tilde{U}_{f0}}$$
 at $\eta = 0$ (41)

ここで \vec{F} は浮遊砂フラックスベクトル (= (F_x, F_y)) で あり、 \tilde{E}_s は浮遊砂の巻き上げ速度である。巻き上げ速 度については様々な式が提案されているが、本研究で は、従来の実験結果を良好に表すことがわかっている、 泉、田中、坪井、伊達³⁾が提案した以下の式を用いるこ ととする。

$$E_s = 1.0 \times 10^{-5} \left(\frac{U_f}{v_s}\right)^4$$
 (42)

他の巻き上げ量式を用いると,解析結果も定量的な影響を受ける可能性があるが,それについては今後の課 題である.

5. **掃流砂の輸送**

掃流砂量式として、河床の局所勾配の影響を取り入 れた次の Meyer-Peter & Müller 式を用いる.

$$\Phi = \frac{\tilde{q}_B}{\sqrt{R_s g \tilde{d}_s \tilde{d}_s}} = 8(\theta_b - \theta_c)^{3/2}$$
(43)

ここで Φ および \tilde{q}_B はそれぞれ無次元および有次元の 掃流砂量, R_s は水中比重 (= 1.65) であり,掃流層上面 ($\eta = \eta_b$) における無次元掃流力 θ_b および無次元限界掃 流力 θ_c は次式で表される.

$$\theta_b = \frac{S}{R_s d_s} \tau_b \tag{44}$$

$$\theta_c = \theta_{ch} - \mu \left(S - \frac{\partial B}{\partial x} \right) \tag{45}$$

ここで B は掃流層上面の高さ (**図**-2 参照), θ_{ch} は平 坦床における限界無次元掃流力 (= 0.047), μ は河床勾 配の効果を表すパラメータ (= 0.1) である. また掃流 層上面での無次元剪断力 τ_b は次式で表される.

$$\tau_b = [\vec{e}_{tb} \cdot \mathbf{T} \cdot \vec{e}_{nb}]_{\eta = \eta_b} \tag{46}$$

Colombini²⁾によれば、掃流層厚さ h_b は次のように表される.

$$h_b = l_b d_s \tag{47}$$

$$l_b = 1 + 1.3 \left(\frac{\tau_r - \tau_c}{\tau_c}\right)^{0.55}$$
(48)

ここで τ_r および τ_c はそれぞれ基準高さにおける剪断応 力および限界剪断応力である。掃流層の厚さは摂動に よって変化しない。すなわちB = Rは一定 $(B_0 = R_0)$ であるとする。そのとき掃流層上面の位置 η_b は次のよ うに表される。

$$\eta_b = B_0 - R_0 = h_b + \frac{d_s}{12} = \left(l_b + \frac{1}{12}\right)d_s \qquad (49)$$

6. 河床高さの時間変化

河床形状の時間変化は、浮遊砂を考慮した Exner 方 程式で次のように表される.

$$(1 - \lambda_p)\frac{\partial \tilde{B}}{\partial \tilde{t}} + \frac{\partial \tilde{q}_B}{\partial \tilde{x}} + \tilde{E}_s - \tilde{D}_p = 0$$
 (50)

ここで λ_p は空隙率, \tilde{E}_s および \tilde{D}_p はそれぞれ浮遊砂 の巻き上げ速度および沈降速度であり, 次のように表 される.

$$\tilde{E}_s = \tilde{v}_s E_s \tag{51}$$

$$\tilde{D}_p = \tilde{\upsilon}_s C[\xi, \eta_b] \tag{52}$$



図-2 掃流層の定義²⁾

上式を代入し, (50) を無次元化すると, Exner 方程式 は次のようになる.

$$\frac{\partial B}{\partial t} = -\frac{\partial \Phi}{\partial \xi} - \frac{\upsilon_s}{d_s} \sqrt{\frac{S}{R_s d_s}} (E_s - C[\xi, \eta_b])$$
(53)

ここで時間 t は次の無次元化を行っている.

$$\tilde{t} = \frac{(1 - \lambda_p)\tilde{D}_0^2}{\sqrt{R_s g \tilde{d}_s} \tilde{d}_s} t$$
(54)

7. 基本解

7.1 流れの基本解

安定解析の基本状態は平坦床等流状態である.基本 状態では各パラメータは次のように表すことができる.

$$(U, V, D, Z, R, C) = (U_0(\eta), 0, 1, 0, R_0, C_0(\eta))$$
 (55)

基本状態のとき流れの支配方程式は次のように単純 化される.

$$1 + \frac{dT_{xy0}}{d\eta} = 0 \tag{56}$$

$$T_{xy0} = \nu_{T0} \frac{dU_0}{d\eta} \tag{57}$$

$$\nu_{T0} = l_0^2 \frac{dU_0}{d\eta}$$
 (58)

$$l_0 = \kappa (\eta + R_0) (1 - \eta)^{1/2}$$
(59)

添字0で表されているのは基本状態における解である. 境界条件は次のようになる.

$$U_0 = 0, \ T_{xy0} = 1 \ \text{at} \ \eta = 0$$
 (60)

式 (56)-(60) より次の対数分布則が得られる.

$$U_0(\eta) = \frac{1}{\kappa} \ln\left(\frac{\eta + R_0}{R_0}\right) \tag{61}$$

上式を $\eta = 0$ から $\eta = 1$ まで積分すると抵抗係数 C_r が次のように得られる.

$$C_r^{-1} = \frac{\tilde{U}_{a0}}{\tilde{U}_{f0}} = \frac{1}{\kappa} \left[\ln \left(\frac{1+R_0}{R_0} \right) - 1 \right]$$
(62)

ここで \tilde{U}_{a0} は基本状態における水深平均流速である.



図-3 砂の粒径と原点および基準高さの関係

従来の開水路乱流での対数分布則を書き表すと次の ようになる。

$$U = \frac{1}{\kappa} \ln\left(\frac{y}{k_s}\right) + 8.5 = \frac{1}{\kappa} \ln\left(\frac{30y}{md_s}\right) \tag{63}$$

ここで k_s は \tilde{D}_0 で無次元化したそれぞれ粗度高さ, m は k_s/d_s である.上式より $y = md_s/30$ のとき U = 0 なので, $R_0 = md_s/30$ となる.通常 $m = 1 \sim 3$ の値 をとるため, $R_0 = d_s/30 \sim d_s/10$ 程度となることがわ かる.本研究では m = 2.5 を採用し, $R_0 = d_s/12$ とした.このとき無次元粒径 d_s は式 (62) より以下の式 で表される.

$$d_s = 12 \left[\exp\left(\kappa C_r^{-1} + 1\right) - 1 \right]^{-1} \tag{64}$$

通常の混合距離モデルでは、原点近傍における特異 性のために流速が急激に減少し負に発散してしまう. そ のため、実際の流速分布を適切に表すことは出来ない. そこでy = 0を粒子の最上点より $d_s/6$ だけ下(体積平 均をとった場合の河床面)に取ることとする(**図**-3 参 照).これにより特異性を有する層の厚さは河床近傍 のごく狭い領域に限られ、その他の領域では実際の流 速分布を再現できると考えられる.

7.2 浮遊砂輸送の基本解

流れの基本解同様,浮遊砂濃度分布の基本解を求める.平坦床等流状態のとき式(21)は次のように単純化 される.

$$-\upsilon_s \frac{dC_0}{d\eta} = \frac{d}{d\eta} \left(\nu_{T0} \frac{dC_0}{d\eta} \right) \tag{65}$$

ここで *ν*_{T0} は次の式で表される.

$$\nu_{T0} = \kappa (\eta + R_0)(1 - \eta) \tag{66}$$

境界条件は次の二つである.

$$\upsilon_s C_0 + \nu_{T0} \frac{\partial C_0}{\partial \eta} = 0 \text{ at } \eta = 1$$
 (67)

$$C_0 = C_b \text{ at } \eta = 0 \tag{68}$$

ここで C_b は底面近傍における浮遊砂濃度である.平坦 床等流状態では、河床変動は生じないため、浮遊砂の 巻き上げ量と堆積量は等しい.したがって C_b は次のよ うに表される.

$$C_b = E_{s0} \tag{69}$$

$$E_{s0} = 1.0 \times 10^{-5} \left(\frac{U_{f0}}{v_s}\right)^4 \tag{70}$$

境界条件のもとで,式(65)を積分すると,平坦床等流 状態の浮遊砂濃度分布として次のような Rouse 分布が 得られる.

$$C_{0}(\eta) = C_{b} \left[\frac{R_{0}(1-\eta)}{\eta + R_{0}} \right]^{\nu_{s}/\kappa(1+R_{0})}$$
(71)

8. 線形安定解析

8.1 摂動展開

先に求めた平坦床等流状態における河床 Z に対し, $Z = A\hat{Z}_1$ の摂動を与える.それに合わせて各パラメー タを次のように摂動展開する.

$$(\psi, P, D, Z, R, B, C) = (\psi_0, P_0, 1, 0, R_0, B_0, C_0) + A(\hat{\psi}_1, \hat{P}_1, \hat{D}_1, \hat{R}_1, \hat{R}_1, \hat{R}_1, \hat{C}_1)$$
(72)

ここでAは摂動の振幅を表すパラメータであり、線形 安定解析のスキームでは無限小であると考える.また \hat{Z}_1 および \hat{B}_1 は \hat{R}_1 と等しいことに注意する.

任意の摂動は、様々な波数を持った正弦関数あるい は余弦関数の足し合わせで表される。そこで単一波数 に注目し、摂動を次のような指数関数で表し、normal mode analysis を行う.

 $(\hat{\psi}_1, \hat{P}_1, \hat{D}_1, \hat{R}_1, \hat{C}_1)$

$$= (\psi_1, P_1, D_1, R_1, C_1) \exp[i(\alpha \xi - \Omega t)] \quad (73)$$

ここで α および Ω は摂動の波数および複素角周波数である.式 (72) は次のように書き直される.

$$(\psi, P, D, Z, R, B, C) = (\psi_0, P_0, 1, 0, R_0, B_0, C_0) + A(\psi_1, P_1, D_1, R_1, C_1) \exp[i(\alpha\xi - \Omega t)]$$
(74)

8.2 流れの摂動解

式 (74) を流れの支配方程式 (16) および (14) に代入 し, *A*のオーダーで整理すると, *O*(*A*) において次式が 得られる.

$$\mathcal{L}^{\psi}(\eta)\psi_{1}(\eta) + \mathcal{L}^{D}(\eta)D_{1} + \mathcal{L}^{R}(\eta)R_{1} = 0$$
(75)

$$i\alpha P_{1}(\eta) + \mathcal{P}^{\psi}(\eta)\psi_{1}(\eta) + \mathcal{P}^{D}(\eta)D_{1} + \mathcal{P}^{R}(\eta)R_{1} = 0$$
(76)

ここで \mathcal{L}^{ϕ} および $\mathcal{P}^{\phi}(\phi = \psi, D, R)$ は線形演算子であ るが,具体的な形については省略する.境界条件 (30)-(34) (式 (32) は常に成立するため不要)からは次式が 得られる.

$$\psi_1(1) = 0 \tag{77}$$

$$P_1(1) = 0 (78)$$

$$\psi_1(0) = 0 \tag{79}$$

$$\frac{\partial \psi_1}{\partial \eta}(0) = 0 \tag{80}$$

また式 (76) および (78) から次式が得られる.

$$\mathcal{P}^{\psi}(1)\psi_1(1) + \mathcal{P}^D(1)D_1 + \mathcal{P}^R(1)R_1 = 0$$
(81)

 ψ_1 を Chebyshev 多項式展開を用いて次のように表す.

$$\psi_1 = \sum_{n=0}^{N} a_n T_n(\zeta) \tag{82}$$

ここで T_n はn次の Chebyshev 多項式, ζ は [-1,1] で 定義される Chebyshev 多項式の独立変数である.また 計算精度をあげるために次の変数変換を用いている.

$$\zeta = 2 \left\{ \frac{\ln[(\eta + R_0)/R_0]}{\ln[(1 + R_0)/R_0]} \right\} - 1$$
(83)

これらを支配方程式 (75) に代入した後,次の Gauss-Labatte 点において式を評価する.

$$\zeta_j = \cos(j\pi/N) \tag{84}$$

それらを境界条件 (77)-(80) および (81) と合わせると 次の線形代数方程式系が得られる.

$$\mathbf{L}\boldsymbol{a} = \mathbf{M}R_1 \tag{85}$$

ここで

$$\boldsymbol{a} = [a_0, a_1, \dots, a_N, D_1] \tag{86}$$

$$\mathbf{M} = \begin{bmatrix} 0, 0, 0, \mathcal{P}^{\mathbf{R}}, \mathcal{L}^{\mathbf{D}}, \dots, \mathcal{L}^{\mathbf{D}} \end{bmatrix}$$
(87)

$$\mathbf{L} = \begin{bmatrix} T_0(-1) & \dots & T_N(-1) & 0\\ \check{D}T_0(-1) & \dots & \check{D}T_N(-1) & 0\\ T_0(1) & \dots & T_N(1) & 0\\ \check{\mathcal{D}}^{\psi}T_0(1) & \dots & \check{\mathcal{D}}^{\psi}T_N(1) & \check{\mathcal{D}}^D\\ \check{\mathcal{L}}^{\psi}T_0(\zeta_2) & \dots & \check{\mathcal{L}}^{\psi}T_N(\zeta_2) & \check{\mathcal{L}}^D\\ \vdots & \ddots & \vdots & \vdots\\ \check{\mathcal{L}}^{\psi}T_0(\zeta_{N-2}) & \dots & \check{\mathcal{L}}^{\psi}T_N(\zeta_{N-2}) & \check{\mathcal{L}}^D \end{bmatrix}$$
(88)

上式中の^{*}は η を ζ に変数変換した線形演算子を表している.

上式を解けば次のような解が得られる.

$$\boldsymbol{a} = \boldsymbol{\mathsf{L}}^{-1} \boldsymbol{\mathsf{M}} \boldsymbol{R}_1 \tag{89}$$

上式より a_0, a_1, \dots, a_N が求まり,式 (82) より次式が 得られる.

$$\psi_1 = \psi_1^*(\eta) R_1 \tag{90}$$

$$D_1 = D_1^* R_1 \tag{91}$$

8.3 浮遊砂輸送の摂動解

流れの摂動解同様,式 (74) を移流拡散方程式 (21) に 代入すると, *O*(*A*) において次式が得られる.

 $C^{C}C_{1}(\eta) + C^{\psi}(\eta)\psi_{1}(\eta) + C^{D}D_{1} + C^{R}R_{1} = 0 \quad (92)$ 上式は式 (90) および (91) より以下のようになる. $C^{C}C_{1}(\eta) + (C^{\psi}(\eta)\psi_{1}^{*}(\eta) + C^{D}D_{1}^{*} + C^{R})R_{1} = 0 \quad (93)$ 境界条件より次式が得られる.

$$\mathcal{S}^{C}C_{1}(1) + \left(\mathcal{S}^{\psi}(1)\psi_{1}^{*}(1) + \mathcal{S}^{D}D_{1}^{*} + \mathcal{S}^{R}\right)R_{1} = 0$$
(94)

$$\mathcal{B}^{C}C_{1}(0) + \left(\mathcal{B}^{\psi}(0)\psi_{1}^{*}(0) + \mathcal{B}^{D}D_{1}^{*} + \mathcal{B}^{R}\right)R_{1} = 0$$
(95)

ここで $\mathcal{C}^{\phi}, \mathcal{S}^{\phi}, \mathcal{B}^{\phi}(\phi = \psi, D, R, C)$ は線形演算子である.

 C_1 についても次のように Chebyshev 多項式で展開 する.

$$C_{1} = \sum_{n=0}^{N} b_{n} T_{n}(\zeta)$$
(96)

Gauss-Labatte 点で評価し、境界条件と合わせる次の ような式が得られる。

$$\mathbf{K}\boldsymbol{b} = \mathbf{N}R_1 \tag{97}$$

ここで

$$\boldsymbol{b} = [b_0, b_1, \dots, b_N] \tag{98}$$

$$\mathbf{N} = - \begin{vmatrix} \mathcal{B}^{\phi} \psi_{1}^{*}(-1) + \mathcal{B}^{D} D_{1}^{*} + \mathcal{B}^{R} \\ \check{\mathcal{S}}^{\phi} \psi_{1}^{*}(1) + \check{\mathcal{S}}^{D} D_{1}^{*} + \check{\mathcal{S}}^{R} \\ \check{\mathcal{C}}^{\phi} \psi_{1}^{*}(\zeta_{1}) + \check{\mathcal{C}}^{D} D_{1}^{*} + \check{\mathcal{C}}^{R} \\ \vdots \end{vmatrix}$$
(99)

$$\begin{bmatrix} \check{\mathcal{C}}^{\phi}\psi_1^*(\zeta_{N-1}) + \check{\mathcal{C}}^D D_1^* + \check{\mathcal{C}}^R \end{bmatrix}$$

$$\mathbf{K} = \begin{bmatrix} \vec{\mathcal{S}}^{-T_0(-1)} & \dots & \vec{\mathcal{S}}^{-T_N(-1)} \\ \vec{\mathcal{S}}^{C} T_0(1) & \dots & \vec{\mathcal{S}}^{C} T_N(-1) \\ \vec{\mathcal{C}}^{C} T_0(\zeta_1) & \dots & \vec{\mathcal{C}}^{C} i T_N(\zeta_1) \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \vec{\mathcal{C}}^{C} T_0(\zeta_{N-1}) & \dots & \vec{\mathcal{C}}^{C} T_N(\zeta_{N-1}) \end{bmatrix}$$
(100)
上式を解けば b_0, b_1, \cdots, b_N は次のように得られる.

$$\boldsymbol{b} = \boldsymbol{\mathsf{K}}^{-1} \boldsymbol{\mathsf{N}} \boldsymbol{R}_1 \tag{101}$$

したがって式 (96) より次式が得られる.

$$C_1(\eta) = C_1^*(\eta) R_1 \tag{102}$$







図-4 式 (103) より得られる増幅率 Ω_i の中率曲線図. $R_p = 10, \quad --C_r^{-1} = 20, \quad --C_r^{-1} = 22. \times :C_r^{-1} = 20$ での dune, $\circ : C_r^{-1} = 22$ での dune, $\bullet : C_r^{-1} = 22$ での dune, $\bullet : C_r^{-1} = 20$ での antidune, $\diamond : C_r^{-1} = 22$ での antidune.

8.4 線形安定解析

Exner 方程式 (53) に式 (90) および (91), (102) を代 入すると,最終的に複素角周波数 Ω は次のような関数 形で求まる.

$$\Omega = f\left(\alpha, Fr, C_r, R_p\right) \tag{103}$$

ここで求められた Ω の虚部 Ω_i が, 摂動の増幅率に相当する.

9. 結果および考察

図-4, 5, 6 に, $\alpha - Fr$ 平面上に描いた増幅率 Ω_i の 中立曲線 ($\Omega_i = 0$)を示す. Froude 数が小さい領域と 大きい領域に摂動の増幅率が正となる領域, すなわち 河床が不安定となる領域が現れている. 前者が dune に 後者が antidune に対応している.

9.1 既存のモデルとの比較

図-4(a) は泉¹⁾による掃流砂のみを考慮した既存の モデルを用いた場合の中率曲線であり、図-4(b) は式 (103) より求めた、浮遊砂を考慮した本モデルを用い た場合の中率曲線である。いずれも $C_r^{-1} = 20$ および 22 をそれぞれ実線および破線で示している。また同時 に Guy, Simon and Richardson⁴⁾が行った実験データ もプロットしてある。ここで、×および。はそれぞれ $C_r^{-1} = 20$ および 22 での dune であり、•および > は それぞれ $C_r^{-1} = 20$ および 22 での antidune を示して いる。

式 (64) より C_r^{-1} の増加は無次元粒径 d_s の減少を意味 する.×および・は $C_r^{-1} = 20$, ○および ◇ は $C_r^{-1} = 22$ に対応しているため、○および ◇ がより粒径が小さく浮 遊砂が活発な場合に対応している.すなわち Guy らに よる実験結果では、粒径が小さくなるにしたがい dune および antidune が発生する Froude 数の値は減少して いることがわかる.しかし浮遊砂を考慮していない \mathbf{Z}_- 4(a) では C_r^{-1} が増加し粒径が減少すると、dune 発生領 域は拡大し、dune 発生の臨界 Froude 数は増加してい る.また antidune 発生領域も Froude 数の高い方向に 移動しており、実験結果と大きく異なることがわかる.

活発な浮遊砂を考慮した場合,duneの発生領域は小 さくなり臨界 Froude 数は減少していることが $\mathbf{2}$ —4(b) よりわかる.一方 antidune の発生領域は Froude 数の 値が低い領域に拡大している.以上のことから,浮遊 砂項の導入によって実験結果が良好に表されるように なった.

9.2 抵抗係数 C_r による比較

図-5(a) および (b), (c) はそれぞれ $R_p = 5$ および 10,20 の場合の図である.太線,実線,破線,点線はそ れぞれ $C_r^{-1} = 18,20,22,24$ を示している.

粒子 Reynolds 数 R_p が小さいとき, C_r^{-1} の増加にし たがい dune 発生領域は Froude 数の小さい領域に移動 し, 臨界 Froude 数も減少する. しかし R_p が大きくな ると C_r^{-1} が増加しても, dune 発生領域は波数の大きい 領域に移動するものの, 臨界 Froude 数はほとんど変化 しないことがわかる. 一方 antidune の場合, R_p が小 さいときの発生領域に大きな変化は見られないが, R_p が大きくなると C_r^{-1} の増加にしたがい臨界 Froude 数 が大きくなる様子がわかる.











図-6 式 (103) より得られる増幅率 Ω_i の中率曲線図. 実線,破線,点線はそれぞれ R_p = 5, 10, 20.

9.3 粒子 Reynolds 数 R_p による比較

図-6(a) および (b) はそれぞれ $C_r^{-1} = 20$ および 22

としたときの図である.実線,破線,点線はそれぞれ $R_p = 5,10,20$ を示している.なお式 (23) より, $R_p = 5,10,20$ はそれぞれ粒径 $\tilde{d}_s \approx 0.1,0.2,0.3$ mm に対応している.

 R_p が大きくなるにしたがい、浮遊砂の影響は小さく なり掃流砂のみを考慮した既存のモデルとほぼ同様の 結果が得られることがわかる.これは河床材料の粒径 が大きくなると、流砂の輸送形態はほぼ掃流砂のみと なるためである.また R_p が減少すると、dune 発生領 域は縮小し、antidune 発生領域は拡大していることが わかる.このことより活発な浮遊砂は dune の形成を抑 制し、antidune の形成を促進していると考えられる.

10. 結論

活発な浮遊砂が河床波の形成条件にどのような影響 を与えるかを理論的に解明するため,浮遊砂の影響を 考慮した線形安定解析を行った.解析の結果,得られ た成果は次の通りである.

- ・ 浮遊砂が活発に生じるようになると、duneの形成 を抑制し、antiduneの形成を促進する。
- C_r⁻¹ = 20 ~ 22 付近では、実験結果を良好に説明できる。
- *R_p*が大きくなるにしたがい、掃流砂のみを考慮した既存のモデルに近づく。

参考文献

- 1)泉 典洋:混合距離モデルを用いた河床デューンの弱非 線形安定解析,土木学会論文集,第51巻,2007.
- Colombini, M.: Revisiting the linear theory of sand dune formation, J. Fluid Mech, Vol. 502, pp. 1-16, 2004.
- 泉 典洋,田中 仁,坪井宏介,伊達政直:河口テラスの 初期堆積形状に関する実験,土木学会論文集,No.740/II-64, pp.109-120, 2003.
- 4) Guy, H. P., Simons, D. B. and Richardson, E. V.: Summary of alluvial channel data from flume experiments, 1956–61, Geological Survey Professional Paper, 462-I, U.S.Government Printing Office, Washington, 1966.
- 5)泉 典洋,山口里美:浮遊砂を伴うデューン-平坦床遷移 過程,土木学会論文集,No.796/II-72, pp.53-67, 2005.
- 山口里美,泉 典洋:デューン-平坦床遷移過程にみられる亜臨界分岐現象,土木学会論文集,No.740/II-64, pp.75-96, 2003.

(2008年4月14日受付)